

新年の挨拶

'95年の年頭にあたって

日本オペレーションズ・リサーチ学会会長
アサヒビール(株) 西日本旅客鉄道(株)

村井 勉



OR学会の会員の皆様、あけましておめでとうございます。

今年が皆様方にとってよい年となるよう、お祈り致します。

振り返るに

本年は太平洋戦争が日本敗戦という形で終結して以来、ちょうど50周年となります。この半世紀は日本にとって焦土となったこの地にかに近代国家的建設の図るか、そして欧米、とりわけ米国に追いつけとの気持ちで精一杯取り組んできたと言えましょう。特に私のような戦前世代は、日々の働きが企業の発展と自らの生活の向上、そして日本の繁栄に通じるのだと信じて日々を送ってきたと言ってもいいのではないかと思います。

そして多くの幸運にも恵まれ我が国は気がついてみればいつのまにか産業面をはじめとして世界のトップに位置するようになり、経済の発展に支えられた繁栄を多くの国民が享受しております。

しかるに、昨今の世界情勢は、ソ連邦の崩壊により冷戦構造が終結し、歴史学者をはじめ多くの人々が予想していたわば「長く退屈な平和」の時代の到来とはいささか様相の異なった時を迎えております。すなわち過去の歴史において幾度となく繰り返されたように、現在も世界の各地で民族、宗教といった原因による地域紛争が勃発しています。

これまでのこれら紛争発生因子を抑制してきた強力な政治イデオロギーのドグマが消失したことにより、百花斉放のごとく紛争が頻発するのを見るにつけ、悠久の歴史の流れの中における人間の所作の矮小さを実感する次第であります。

経済面に限ってみても、アジア地域においては中国をはじめ加熱気味の様相を呈しつつも飛躍的

な進歩を遂げるなど発展段階は続いていますが、平行してますます深刻化する地球環境問題、さらに改善の兆しが見えない南北問題など世界は難題を抱えております。

このような状況下、これまでは世界の工場といった役割に終始してきた日本に対し、世界はその実力に応じた役割を期待もしくは要求するような事態となっています。

一方、目を国内に転じれば、政治における与野党間の政権交代はまさに中国春秋時代の「合従連衡」「呉越同舟」を地で行く状況であります。さらに国内景気、産業構造に関しては、長引く不況要因がこれまでの景気循環とは趣きを異にし、単に国内の市場メカニズム論理に立脚した予測では役に立たない状況であり、企業は再生をめざし、模索の日々を送る状況は今年も続くのではないのでしょうか。

ORを取り囲む社会情勢と重要な責務

各企業においては、昨年大きなブームとなったリエンジニアリングの実行で企業体質の抜本的な変革をめざす一方、たとえば製造業では世界の工場という今までの位置づけを再点検、世界を視野に入れたまさに企業存亡をかけた生産拠点の再配置、最適化に着手、実行に移しているところであり、70年代以降の米国の例を引くまでもなく、この生みの苦しみはこの先しばらく続くのではないかと思います。

ORが経営の科学であるということは、本学会のお手伝いとして企業サロン等で講演させていただき、各先生方、学会関係者の皆様とのお付き合いを通じ、漠然と理解してきた次第であり、しかと

認識したのは恥ずかしながら昨年会長に就任してからであります。

それまでは工場の製造方式あるいは物流方式の改善といった純技術的分野に関する各種手法とその有効性の検証といった極めて限定的なものと感じていました。

私はこれまでもたびたび申し上げてきましたように金融から企業経営に人生の主な時を費やしてまいりましたが、経験から申し上げれば企業発展をするための施策には大なり小なりそれはリスクを伴うものであります。変化の激しい昨今、たとえば、各企業における種々の挑戦に対してORが単なる統計学の範疇にとどまらない総合的なアドバイスをを行なえるようになれば、また世間の注目度合いも異なってくるのではないのでしょうか。

このように時代の要請はその時々によって変化するものであり、それに適切に対応していくというのも使命であると言えるでしょう。

OR学会の抱える課題について

この学会の持つ特性を最大限に生かす、すなわち学界から実業界までの幅広い層からの参画とその対象範囲の広さという点を生かし、求心力を一層強めることによって、ますます盛んにしたいと思っております。

このためには前提として、ORのアイデンティティを期待と実績を通じて定着させていくことが重要であり、学界および実業界における認識および実質的な活動促進に関して、私も微力ながら努めていく所存であります。

私自身ORというものに対しては、十分な知識を持ち合わせておらず、諸先輩方からのお話などから感じたことを申し上げれば、ORは単なるモデル化、その応用のための道具であると社会から見做されており、コンピュータ処理能力の向上も一因となって、そのモデル化、解法のテクニックが重要視されなくなった面があるようです。

そのためには、学会会員のそれぞれが、ORとは何か、ORの社会的な位置づけと役割とは何かを認

識して、それを社会に対して啓蒙する必要があると思います。

前述しましたが、確かにORは多種・多様な分野に横断的に取り入れられていますが、その反面、統一した基準、共通の世界がないことから学会会員にとっては、拠り所とならないのではないかととも思われます。

このためにも、これまで以上に学会内の人心の融和・交流が、具体的に進められる必要があるでしょう。

国際化への対応について

昨年8月、APORSの第3回大会が福岡で開催されましたが、学会関係者をはじめ、多くの会員の努力により盛大に開催することができ、成功裡に終了することができましたことを紙面をお借りしてお礼申し上げます。

冒頭申し上げましたが、アジア諸国の経済躍進はいちじるしいものがあり、歴史的、地理的な面で深い関係にある日本にとってはこれまで以上にこの世界とのかかわりが重要となり、避けられなくなりつつあります。

他学会に比べどちらかと言うと表に出にくい面はありますが、我が国の国際化の進展をリードするくらいに本学会も国際交流に努め、いささかなりとも貢献できないかと感じる次第であります。

OR学会は設立以来今年で38年が経過することとなり、人間で言えば「不惑」の年が視野に入ってまいりました。

21世紀がいよいよ視野に入ってきた今年、ORが時代とともに次世紀に向かって羽ばたけるか、まさにOR (is) to be, or not to beの心地であります。

将来に向け、OR学界が確固とした基盤を形成し、有効な活動ができることを信じ、私のモットーである「ネアカ、ぐんぐん猛ダッシュ」で、今年も頑張りますので、皆様のご理解とご協力をお願いします。